

別紙1-1

## 論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※ 甲 第 号
------	---------

氏 名

坪 田 彩 乃

論 文 題 目

クラスルームテストの作成・評価方法の検討：  
多枝選択式項目作成ガイドラインと識別力指標について

論文審査担当者

主 査

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 石井秀宗

名古屋大学大学院教育発達科学研究科教授 高井次郎

名古屋大学大学院教育発達科学研究科准教授 光永悠彦

## 別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

テストは、教育成果の実態について情報を与えてくれる道具の1つである。テストを作成する際には、測定したい能力以外の要因が正誤に影響しないような項目を作成するとともに、実施の意図に沿うテストであったかを検討する必要があるが、学校現場などでは、テストの評価そのものが行われていないことが多い。その原因の1つとして、項目作成や項目分析に関する知識があまり知られていないという事実がある。そこで本研究では、テストの専門家のみならず、テストの非専門家がテストの作成・実施・分析を行う際に有用な知見を提供することを目的として、テスト項目の作成時ならびにテスト実施後の評価にかかわる問題について検討を行った。本論文は5つの章から成る。

第1章では、学校現場で教師が作成するクラスルームテストについて、教育評価の観点から、テストが行われる目的、児童・生徒に及ぼす影響について整理した上で、テスト作成時に生じる問題点や、テストの評価を行わないことで生じる問題点等について述べた。

第2章では、よいテストとはどのようなものであるかを、テストの基本設計・目的・項目形式ならびにテスト実施後の評価の観点から検討した上で、テストを作成する際に利用される項目作成ガイドラインについて整理するとともに、テストが作成者の意図に沿っていたかを検討するための項目分析の必要性について論じた。

第3章では、研究1として、多枝選択式項目作成ガイドラインの検討を行った。ガイドラインに準拠／非準拠となる項目を作成し実施したところ、「各設問の内容は互いに独立であること」や、「『でない』『～以外』などの否定表現を用いないこと」などのガイドラインにおいて、ガイドラインに非準拠であることが受検者に気付かれないにもかかわらず、項目正答率や識別力に影響を及ぼすことが確認された。

第4章では、研究2として、識別力指標(D指標)についての検討を行った。D指標を算出するには受検者を合計得点に基づいて上位群、中位群、下位群の3群に分ける必要があるが、テストの項目数が限られる場合は、同点の受検者をどのように群分けするかが問題となる。本研究では、コンピュータシミュレーションと実データによる検討を行って、群分けの方法について検討した。その結果、同点受検者をランダムに群分けしたり、項目正答率に基づいて群分けするよりも、項目のI-T相関など識別力に関する別の情報を用いて群分けした場合のほうが、D指標の真値に近い結果になることが明らかにされた。

別紙 1 - 2

## 論文審査の結果の要旨

第 5 章では、以上の研究を踏まえ、テストの作成ならびに評価についての研究成果から、クラスルームテストを作成・実施するための方略について総合的に検討を行うとともに、本研究の限界について考察した。

以上の論文の内容に対して、審査委員から次のような質問及び指摘がなされた。

- ・項目反応理論、特に特異項目機能との違いについて説明し、本研究の目的をより明確にする必要があるのではないか。
- ・識別指標として D 指標を用いる理由は何か。他の識別指標についても説明し明らかにすべきではないか。
- ・どのような対象に対してどのような示唆を提供し得る研究か。多枝選択式テストだけでなく、記述式テストや質問紙調査などへの応用可能性も考えられる。

これらの質問や指摘に対し、申請者から適切な応答がなされ、また、本論文・研究の限界及び今後の課題についても適切に認識していた。

本論文は、教育現場で用いられる多枝選択式テストの作成及び実施をより適切なものにすることを目的として、問題作成ガイドライン及び識別指標の 1 つである D 指標について検討したものである。日本国内においては、問題作成ガイドラインの存在自体があまり知られておらず、多くのテスト作成者が、自身の経験や慣例によってテストを作成・実施しているのが現状である。本研究は、問題作成ガイドラインに焦点を当てるとともに、その適切性について実際にテストを実施し、解答データに基づいて検討している点に、高い独創性と学術性がある。当該分野においても本研究の意義が評価され、研究 1 をまとめた論文は学会論文賞を受賞している。また、D 指標の検討は、テストの事後的評価をより一般的にするものとして、広く教育に貢献する研究であると考えられる。

よって、審査委員会は全員一致して、本論文を博士（心理学）の学位に値するものと判断し、論文の審査結果を「可」と判定した。